

さらなる研究のご発展を

福祉と健康コースコース長 山 縣 文 治

不思議なご縁である。1995年、当時、本学社会学部の教授であった松原一郎先生に誘われて、高齢者問題を多角的に検討する研究会に参加することとなった。その場におられた方のなかの一人が、当時大阪府立大学の教授をしておられた黒田先生である。私は、大阪市立大学の助教授であった。その3人が20年の時を経て、関西大学に集うことになった。ちなみにこの研究会の成果は、『高齢者ケアの社会政策学』（松原一郎編、1996、中央法規出版）として公刊されている。

黒田先生とは、それ以前も、研究会や市町村の委員会等で何度か一緒にする機会があったが、直接身近にご指導を受けたのははじめてのことであった。議論のなかでは、常に他の委員の意見を受け止めつつも、自説に強く拘わられていたことを記憶している。これは、人間健康学部で一緒にすることになってからも大きくは変わっていないと改めて感じた。

学生は、親しみを込めて先生のことを「くろけん」と呼ぶ。私のもっている先生のイメージでといえば、軽く両腕を組まれ、常に柔和な笑顔で学生たちに向き合われる姿である。ゼミ生が、自宅に招待させていただいた奥様の手料理は、極上の味であったという。また、「ラウンドワン」でボーリングのピンに扮された先生の写真には、みんなで大笑いしたものである。時にはユーモアを忘れず、常に真摯にご指導される先生の姿勢に、学生も教員も心から感謝している。

「まだまだ研究したいことがあるんです」。70歳を前にして、いまだ研究意欲の衰えることのない黒田先生。西九州大学においても、ますます研究を発展させられ、高齢期の人間の生き方や支援のあり方を追求していただきたい。

本当に、お世話になりました。